
出ていけっ！

一日千秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出ていけっ！

【Nコード】

N2862K

【作者名】

一日千秋

【あらすじ】

ボロい借家をめぐって巻き起こる、黒猫クロと人間ユキの非日常。『オレ様の家から出ていけっ！』果たしてクロの理不尽な要求は通るのか。川沿いの閑静な住宅街を舞台に、一人と一匹のゆるゆる生活が始まる。

異世界に飛ばされたりしません。怪物も出てきません。非常にまったりとしたお話になるかと思えます。

第一章く？> おうち終了のお知らせ

オレはこの町のボスだ。多くの部下と三人の妻を従え、十五人のガキを養っている。

この世界は実力が全て。オレに逆らえる者などこの町にはいない。オレは周囲から、敬意を込めてこう呼ばれている 『偉大なるボス・クロ様』と。

悪いが、オレの自己紹介はここで終わりだ。今言いたいのはそんなことじゃない。

緊急事態なんだ。有り得ねえよ。あっちゃいけねえよ。

この秋晴れの清々しい日に。

オレ様が…… 寝床を奪われるなんて。

「そっちの荷物は寝室に運んでください。タンスは居間の隅に……
つて、あれ？」

無礼極まりない侵入者はやっとオレの存在に気付いた。

なんとなく気に食わない、柔らかな顔つきの男。ウェーブした髪は寝癖にしか見えない。

年は三十歳に達しないくらいだろうか。お世辞にも似合っているとは言えないジャージが目をついた。

早い話、こいつは「ないない尽くし」の冴えない奴ってわけだ。

「……わあ、ビックリしました。おはようございます黒猫さん。我が家に何かご用でも？」

男が爽やかな笑顔で放った言葉はオレを絶望させた。
オレの愛しい棲家に……、庭付き木造平屋建て家賃五万円に……
借り手がついたのだ。

最近になって大家がそわそわしだしたのは、こいつのせいか。

「朝ご飯は食べました？ かつお節くらいなら用意できますけど？」

伸びすぎた芝を踏みしめて近づいてくる男。微笑は標準装備のようだ。

流行りの言葉で言うなら、 「ウザイ」 で決定だな。

『メシなんざいらねえよ。オレ様の家からさっさと出ていけ』

日の当たらない塀の側でオレは毛を逆立ててうなった。臨戦態勢
ってやつだ。

大概の奴はこれで終わる。ビビって逃げるか、勝負してぶちのめ
すか。

しかしこいつは、……一味違った。

「ふふ、やだなあ。」 オレ様の家” だって。誰の許可を得てそんな
こと言ってるんですか？」

有り得ねえよなあ。 うん、有り得ねえよ。

猫語を理解する人間なんて……そんなの有り得ねえよ。

第一章く？く おうち終了のお知らせ（後書き）

どう考えてもクロの方が不法侵入だろう。

でも猫って、庭とか普通に素通りしていきますよね……。

更新は亀さんペースです。それでもいいよ！読んでやるよ！という方は是非お付き合いください。

<??> おつち終了のお知らせ2

猫神さま、猫仏さま。どうか、侵入者いしゅうに天罰を。

「ふふ、驚いてますね。”なんでオレ様の言葉がわかるんだ？”って顔してますよ」

『うるせえ黙れ！ さっさと出ていけ！』

「またそれですか？ 困りましたね。引越してきたばかりなので無理ですよ？」

白状する。オレは激しく動揺していた。

こんなイレギュラーに遭遇したら誰だって混乱するよな。オレだけじゃないはずだ。

「えーと、初めて出会ったらずは自己紹介ですよね！」

なんだこの苛つくテンション。こいつ、絶対にこの状況を楽しんでやがる。

朝早くからオレの安眠を妨害した上に、寢床を奪って自己紹介だ？ 冗談は顔だけにしろ。

『お前については何も知りたくねえよ。オレ様の怒りが爆発しないうちに出ていった方が身のためだぞ？ 引越し早々ケガなんて御免だろ？』

「えーと私の名前はですね……」

聞いちゃいねえ。

「雪村さなえといひます。気軽にユキとでも呼んでくださいね」

『けつ、本人と同じくヒヨロヒヨロした名前だぜ』

「ああもう、全国の雪村さなえさんに失礼じゃないですか」

ユキだろつがミゾレだろつがオレの知ったこつちやねえ。

全国の雪村さなえ、お前らには何の恨みもないから誤解するなよ？

「雪村さん！家具の配置についてちょっとお聞きしたいのですが
ー！」

玄関前で引越業者の兄ちゃんが声を張り上げた。深緑の作業着は
広告でよく見るやつだ。

爽やかな対応が売りの業者で、スッキリとした髪型は侵入者^{ユキ}と対
照的だった。

庭の隅でオレと対峙していたユキは、兄ちゃんに負けないぐらい
のスマイルを浮かべる。

「あ、はいはい、今いきます」

『ちよ、おい！』

去り際、ユキはオレに子どものような顔を向けた。

「ふふ、新居に話し相手がいってくれて嬉しいです。いつまでいても
いいですよ」

『何度言ったらわかるんだ！ここはオレ様の家だって言ってるだ
ろつが！』

「じゃあ、あなたが家賃五万円払えるようになったら譲ってあげま
すね」

うわ、ウザすぎて猫パンチしたくなってきた。

大家を味方につけたからって調子に乗るなよ侵入者め！

x

作業員のすきを見ながらの隠密行動。ユキは玄関に入って突き当たりの部屋にいる。

初めて入った我が家は薄暗くて、オレは庭の暖かさが恋しくなつた。

「ここに本棚を置きますと本が日焼けする恐れがあります。それでも構いませんか？」

「ああ、それは大丈夫です。本棚自体に遮光カーテンをかけますから」

ふざけた笑顔で意味不明なことをほざくユキ。本のためにそこまでするのか。

それにしても見上げるの面倒くせえな。人間の顔つてのは高いところにあるから厄介だ。

「それなら問題ないですね。では次に、居間の確認をお願いします」

物陰に隠れているオレの前を、作業員の真新しい靴下とユキのボロい靴下が通り過ぎる。

若いやつらの間じゃダメージジーンズとやらが流行ってるが、このボロさはそれと似て非なるものだ。オシヤレ上級者もビツクリな痛めつけ具合だぜ。

居間には隠れられそうな所が無く、オレは廊下から中を窺うこと

にした。リーダー格の作業員はユキと話をしているし、あと二人は居間の奥にある寝室にいるから大丈夫だろう。

油断している隙について、カーペットやら障子やらをぼろぼろに
してやる！

「テレビをこの角度で配置しますと、陽光が反射して見にくいと思
うのですが」

「ああ、それも大丈夫です。日中は会社で過ごしますから」

「それなら問題ないですね。えーと次は寝室ですが……」

おいおい、さっきから似たような会話ばかりじゃねえか。なん
だお前ら。

一日のほとんどを会社で過ごすなら会社に住めばいいだろ。オレ
の意見は正しいはずだ。

それよりテレビでかいな。水戸黄門様が大画面で見られるってわ
けか。贅沢すぎる。

「寝室はご希望通りの家具配置で問題ないと思われます。気になる
点はございますか？」

「そうですねえ。営業の方から不要品回収もできると聞いたんです
けど」

「あ、はい。サービス期間中ですので何でも承りますよ」

「じゃあ、持っていつてもらいたい物が」

『ぎゃああー！』

なんだ？

なんなんだ！？

体が勝手に浮いたぞ！

「……はて？ なぜこんな所に猫が……？」

「あ、大家さん！ おはようございます！」

「ああ。なんたる屈辱。玄関から堂々と入ってきた大家に気付かなかったなんて。」

「ちなみに大家は御年八十歳の爺様。高齢化の進むこの町ではさして珍しくない。」

「なかなか眼光の鋭いゴロツキ猫じゃな……」

「余計なお世話だ。目つきについては語ってくれな。」

「まあそれはいいとして、さっきから丸刈り頭の兄ちゃんがこっち見てるぞ。」

「猫っスか!？」

「あの輝く目は猫好きの目だな。そしてその口調はアルバイト君だな。」

「兄ちゃんは寢室からずんずん近づいてくる。怖い顔して猫好きという、ギャップ狙いか。」

「ユキはひたすら楽しそうだ。それを見るだけで苛々する。」

「俺、猫大好きなんス！」

「言わなくてもわかるわボケ。残念だが、野郎に愛でられたってちつとも嬉しくねえよ。」

「……なんだかメタボってないですか、その猫」

「リーダー格の兄ちゃんが営業口調を忘れて呟く。それを聞いたユ

キがにこりと笑った。

「きつと良い食事をもらってるんですよ。さぞかし素敵なエサ場があるんでしょうね？」

それはオレ様に向かって言ってるだろ。「ここじゃない別の場所に行ったらどうです？」とかそんなニュアンスが含まれているに違いない。

悪いが全力で断るぜ。オレのプライベートゾーンを消されてたまるかってんだ。

「……申し訳ないのう雪村さん、猫が棲みついている家でも構いませんかの？」

「ああ全然大丈夫ですよ。どうせ妻が退院するまで寂しい生活ですから」

あーあ、なんかショックだ。こんなヘラヘラ野郎でも結婚できるのか。

退院って病気が何かだろうか？

また寝室から兄ちゃんが出てきた。丸刈り野郎より好印象だな。特徴には欠けるが。

「奥様の荷物、運び終わりました。ご出産はいつ頃でしたっけ？」

「一月の中旬です。ふふ、きつと可愛い子が生まれますよ」

オーケー、把握。つまり幸せの絶頂で笑いが止まらない時期ってわけだな？

嫁さんとガキがいるなら、このボロ家はますますオススメできねえぜ。

ん？ 一月中旬ってことはあと二ヶ月はあるな。入院の必要あるのか？

「とりあえず引っ越し完了ですね。散らかってますけどお茶とお菓子なんていかがです？」

ユキの提案に丸刈り兄ちゃんが食いついた。

「それはもしかして和菓子ですか？ 先輩、今日は午後の予定は無いしいいっすよね？」

「こら、柏木！ 申し訳有りません。こいつ無類の菓子好きでして……」

「いやあ構いませんよ！ 働いた後には甘いモノが一番です」

「では、お言葉に甘えさせていただきます。矢部、社に連絡を入れてくれ」

「はい、先輩」

「大家さんはいかがです？ 晴れた日に飲むお茶は格別でしょう？」

「ほお？ そうじゃな、若いモンに混じっての茶会もいいかもしれん……」

まさか超居心地の良さそうな縁側を使うんじゃないだろうな。

雨戸が閉まっていて今まで使えなかったのに！

それより爺さん、さっさとオレを下ろしてくれ！！

<?> おうち終了のお知らせ2 (後書き)

動物の視点って難しいですね。

なんだか色々と勉強になりそうです。

余談。資料として雪村家の間取りを描いたのに
全く役に立ってない件についてorz

<??> おうち終了のお知らせ

縁側つてのは気持ちいいもんだな……。ポカポカしてらあ……。

「この和菓子ヤバいっスね！ タマも食うかつ？」

オレは今、丸刈りバイト兄ちゃんの膝上にいる。綺麗なお姉さんじゃないのが残念だ。

『眠くて眠くてとろけそうだぜ……。兄ちゃん……。オレの名前はク口だぞ……。』

「ふむ、タマは眠そうじゃの？」

大家までオレをそう呼ぶのか。ク口だって言ってるだろうが。

オレがタマと呼ばれていることに関してユキは何の指摘もしない。腹立つなあオイ。

お前、オレの言葉通じてるはずだろゴルア。

「たまにはこういうのもいいですね。シーズン中は一日三件も仕事が入っていたりして、休む暇ありませんから……。」

上からリーダー格兄ちゃんの声が降ってきた。ズズズ、と茶をすすめる音も聞こえる。

特徴がないという特徴を持つ兄ちゃんも、うんうんと同意の声を出した。

引越業者も大変だな。毎日寝て食って喧嘩してる猫に人間の忙しさはわからねえけど。

「ふふ、今は完全にシーズンオフですからね。あの大幅値引きには感謝しています」

そう言ってユキは笑う。いや、顔は見えねえけど絶対に笑ってる。

「いえいえ、今だから言える話ですが……」

ユキの発言を受け、リーダー格の兄ちゃんが含み笑いとともに切り出した。

「営業の川上、雪村さんの値引き交渉に圧倒されたそうですよ。普通は”契約を結ぶまで帰らない”と居座る局面で、川上の場合は”値引きするまで帰らせてもらえない”って感じだったらしくて」

「ほお？」

大家は興味深そうに聞いている。

こいつもユキと交渉した一人だからな。何か心当たりがあるのかもしれない。

「それを聞いた社員一同、川上を責めることなど忘れて慌てましたよ。どんなに恐ろしいお客様なのか、とね。ヤクザ関係の方というのも視野に入れていたぐらいです」

何が可笑しかったのか、大家が「ふおふおふお」と声をあげて笑い始めた。バイト君にも大ウケだったようで、オレをのせたゴツい膝が揺れに揺れる。

当のユキは「ええ？ 私何もしてませんよお？」と困惑気味だ。

「雪村さんが極道とはもう！ 儂わじと話したときは仏様のような顔じゃったぞい！」

「ホトケ様っスか！ それヤバいっスよ！ 半端ねえっス！」

オレにとって一番笑えるのはお前らのジェネレーションギャップだっつーの。

「……川上先輩は『とにかく恐かった』としか言わないので、雪村さんが普通のサラリーマンだと知ったときには力が抜けました」

特徴無し兄ちゃんの声は落ち着いている。こいつ、三人衆の頭脳ポジションだな。

ただのヘラヘラ野郎が恐かったって？ いやいや嘘だろ。営業の川上が嘘ついたんだ。

「……うーん、何がそんなに恐かったんでしょうか？ 妻の入院と会社の状況を持ち出して、川上さんの人情に訴えかけただけなんですけど」

ああなるほど。笑顔での詰め寄りは怖いよな。

無自覚のうちにやってるなんて、ユキの厄介さは「半端ねえっス！」の域だぜ。

あ、やべ……、眠い……。秋の陽気は最高だな……。

「おい、タマ？ ターマ！ 寝るなよ。連れて帰っちゃうぞ」

「やめておけ柏木。そんなブサ猫、彼女が嫌がるぞ？」

「ブサ可愛いって言葉もあるじゃないっスか。ね、矢部先輩はどう思います？」

「あー……、とりあえず佐倉先輩に従った方がいいんじゃないか。彼女云々は抜きにして」

「ふおふお、若いモンはお盛んでええのう。俺も昔はブイブイ言わ

せておつてな……」

「ふふ、大家さんは今でも十分お若いですよ？」

薄れ行く意識の中、オレは何か大事なことを忘れているような気がした
……

寢床の奪還、とかね。

以下、どうでもいい設定集。

【引っ越しの住吉^{すみよし}】深緑の作業着。対応の爽やかさに定評がある。

雪村家に関わった人たち。

営業：川上。ユキに詰め寄られ、交渉負けした29歳。

指揮：佐倉。作業時は営業口調。スツキリ爽やか30歳。

頭脳：矢部。唯一の特徴は落ち着いていること。28歳。

バイト：柏木。チャライが悪いやつではない。猫好きの23歳。

大家：田代。どっかの昔話に出てきそうな80歳。まだまだ元気。

こいつら、無意味に好きだった。また出したい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2862k/>

出ていけっ！

2010年10月9日22時35分発行